

第3回プロジェクト研究会②
2001年大阪調査の結果報告
—— 学力と学習状況との関連から ——

報告者 センター研究員（東京大学大学院教育学研究科教授） 荻谷剛彦

2002. 3. 16

それでは私のほうは少し観点を交えて、お話ししたいと思います。志水さんの発表のなかでも89年と今回を比べてみると、塾に行っていない子どもの中で学力の格差が非常に広がっている。これはある意味言えば、平均で学力をみているだけではだめだということの決定的な証拠だと思います。つまり、学校だけで学ぼうとする子どもにとっては、塾という下支えがない場合に、この10年間、非常に大きな変化が起きているということです。そして、それは、これからお話しする階層と非常に密接にかかわる問題です。

今回の調査では、調査上の制約もあって、十分なことが聞けてはいないんですが、それでも何とか先ほども志水さんのところでも出てきたような項目を使いまして、家庭の文化的環境、文化的階層とか文化的環境というふうに呼んだものの影響をみていきたいと思っています。

最初に、どういうことをしたかという手順をご説明して、後は実際にデータを示していきたいと思っています。ここでは因子分析という方法を用いまして、先ほども出てきたようないくつかの項目、たとえばここであげておりますが、家の人がテレビでニュース番組を見るかという、これは4点尺度で、とてもあてはまるからあてはまらないまで、4段階で聞くような質問になっているんですが、そういう尺度を使った、家の人が手作りのお菓子を作ってくれる、小さいとき家の人に絵本を読んでもらった、家の人に博物館や美術館に連れて行ってもらったことがある、家にはコンピュータがある。この最後の項目だけイエス・ノーなのですが、ほかについては4点から1点といった得点を与えて、5つの項目をもとに因子得点を出しました。その得点分布上で、ちょうど調査対象者が人数の点で3分の1ずつになるようにグループを構成しました。あくまでも相対化したグループです。人数が3分の1ずつにそろえて、上位グループ、中位グループ、下位グループと呼ぶことにして、この文化的階層グループごとに、学習態度であるとか、行動、先ほどの数学や算数、国語の得点の分布などについて、どういう違いがあるのかを見ていこうというのが今回行った作業です。

まず、小学生なんですが、全体の平均で70点内外の、

かなり基本的な問題です。それでもすでに小学校5年生の段階で文化階層の下位と上位で見ますと、国語で7点、算数で8点ぐらいの差がでてきます。次に、中学生の結果です。中学生について、国語の平均点が、階層の上位グループと下位グループでは、10ポイント近い正答率の差になります。それから、数学でもやはり中学校のほうが小学校に比べて差が大きく出ています。とにかくいずれにしても小学校よりも中学校段階でこの文化階層による格差が拡大しているということを、まず最初におさえておきたいと思っています。

次に、生活時間についても、平均を分で出しました。小学校の平均の勉強時間をみますと、やはりここでも小学校5年生段階で、家での勉強時間が35分ぐらいから50分までということで、一日平均ですから10数分間の文化階層の違いが出てきます。家庭環境によって差が出るのは当たり前だという見方もあるかもしれませんが、こういった論点については教育改革の議論のなかでは一切出てこない問題です。前の私の研究では、高校生の段階ではこういう傾向が相当大きく出ているし、しかも過去と比べても拡大していることがわかっていました。今回やってみて、小学校の5年からこういう差が出てきているというのは、改めて考えさせられる結果でした。

次に、中学生の勉強時間です。ちなみに中学生のほうも勉強しないんですけども、それでも格差はやはりここでも非常に大きくなっています。他方、テレビを見る時間ですが、これも家庭環境によって20分ぐらい違いが出てきます。それから、中学校のテレビを見る時間、これもやはり10数分の違いがあります。それから、本も読まないけれど、マンガを読む時間というのは、やはりこれもどういった家庭環境に生まれ育ったかによって、差が出ます。

次に、こういった生活時間だけではなくて、実際の学習の行動について、まずは、学校のなかでの学習行動、それから、家庭での学習行動についても階層差があるのかどうかを見ていきたいと思っています。行動面や態度の面でそこでいう格差が家庭環境の差として現れているのかどうかを見ようということです。

最初に、授業中、しっかりノートをとっているかどうかについてみると、さすがにノートをとっているという答えが出ているんですが、それでも、「とてもよく」としているという、一番強い肯定の回答については小学校5年の段階で家庭環境の差が15ポイントぐらいあらわれます。中学校について見ていただくと、今度は52.8と70.7ですから、ここではもう18ポイントぐらいの差になってあらわれます。つまり、学校のなかでどういう勉強態度であるかということについて、ノートをとるという一番基本的な行為でも文化階層の影響がでているということです。

それから、これは私にとって非常に考えさせられる結果だったんですが、いわゆる新学力観型の学習、調べ学習であるとかグループ学習だとかに対して、改革のねらいからすればそういうことを通じて子どもたちの学習意欲が高まっていくという、そういう非常に重要な手段とみなされている学習活動なんです。そういう調べ学習にしてもグループ学習にしても、小学校5年の段階ですでに、どういう家庭環境に育つかでそのかわり方に非常に大きな差があります。たとえば、調べ学習に積極的かどうかという質問に対する回答をみてみますと、「とても」と「まあ」を合計すると、下位だと13.6%、26.4%、それが上位の階層になりますと23.8%、40.3%というふうになります。つまり、自分たちが調べたり考えたりする授業というのは、うまくやれば子どもたちの力を引き出して、われわれが今回テストでやったようなペーパーテストで測られる学力とは違うものを引き出す、そういう学習だと思いますし、ある意味では意欲とか関心ということ言えば、それ自体がいわば「新しい学力」を示しているわけなんですけれども、こうした学習へのかわり方においても小学校5年の段階でこれだけ家庭の差が出てしまう。これは欧米の先進国のなかでも、インビジブル・ペダゴジー、目に見えない教授法などによばれる学習方法をとったときに、家庭の文化的な背景とのかわりが現れるという研究がありますが、日本でもこういったものが歴然とあります。おそらく今回日本でははじめてわかったことではないかと私は思っていますが、こういう結果が出てきました。

中学校でも歴然とした結果が出てきていますので、やはり、誰がこういう学習ののってくるのかということを考える必要があると思います。

同じように、今度はグループ学習のなかで自分がまとめ役になるかどうかということへの肯定的な回答率ですが、これも、倍近く文化階層の差がみられます。本来、家庭的な背景による差というのはないことになっていて

改革をやってきたんでしょけれども、子どもたち自身が自らかかわってやっていかなくてはいけないような学習において、これだけの歴然とした階層差があるわけです。中学校の段階でも20ポイント近い差が出てきます。

そこで、今度は、そういった学習を自分でどれぐらいやりたいと思っているか、希望しているかどうかということの結果をみたいと思います。発表したり討論したりするような授業を望んでいるかどうかという質問です。「あなたは次の1から8のような授業を受けたいですか」ということで、たとえば小学校で言えば、「自分たちで調べる授業」とか「自分たちの考えを発表したり意見を言い合う授業」、これを「とても受けたい」か「まあ受けたい」か「あまり受けたくない」か「全く受けたくない」という、これがまさに意欲というふうに言っていると思うんですけれども、そういう学習へのかわり方、態度ではなくて実際に学習することを望んでいるかどうかということについて、やはり同じように文化階層との関係を見てみました。発表とか討論の授業にかかわりたいという数字は、小学校段階でも歴然とした差があり、それから自分で調べる授業についてもやはり下位グループは「よくある」が12.8で、「時々」が19.9、そして上位のグループは23.5と34ですから、やはり単にかかわりが薄いだけではなくて、やりたいとおもっているかどうかについても差があるのです。ちなみに全体を見るとわかりますが、こういう学習を子どもたちが好んでやっているかということ、全然そんなことはなくて、こういう活動はあまり好きじゃないんですね。実際に算数と国語の今回やった学力テストの実際の正答率でグループを作って、これらとのクロスをとりますと、歴然とした差が出ます。つまり、いわゆるペーパーテストで測られる学力の低い子どもはこういう学習をやはりやりたがっていません。ですから、おそらく、今までのような黒板を背にした授業の形態から子どもたちが参加するような形態に変えても、いわゆる旧来的な意味での学力が高い子どもほど参加型の学習をやりたがるわけです。それから、中学生についても同じように階層グループごとにみますと、発表する授業を好ましいと思うかどうかということを見ても、やはりどういう家庭環境かによる差が非常に明確に出てしまいます。非常にこの辺のところは難しいところです。実態としてはどういう子どもがこういう学習で取り残されていくのか。いわゆる新しい学力観の考え方でやっても、意欲という点やかかわりの点で階層差があって、しかも旧来的な学力でみても階層差があるわけです。

もうひとつ僕のほうでやってみたのは、さっき志水さんのところでもいくつか新しく分析を加えられていたん

ですが、同じような重回帰分析をやってみました。はじめに小学校の国語です。説明変数としては、家庭環境は先ほどの上位、中位、下位のグループをそれぞれ、上位だと3点、中位だと2点、下位だと1点と、非常に単純に数値を与えました。それから、宿題をやるかどうかとか、わからないところはさらに自分で調べるだとか、嫌いな科目もがんばるかとか、そういう項目も入れてみました。ここでの分析はまだ試行の段階です。小学校の国語については、宿題をやるかどうかというのはほとんど統計的に有意な結果が出てこない。おそらく家庭環境が入っているせいだと思いますが、家庭環境の影響のほうが強いんですね。勉強時間についてはやはり大きな影響があります。それから、中学校の国語も同じように分析しました。今度は勉強時間は全然有意でなくなりまして、家庭環境と女の子の成績がよくなるという傾向が出てきます。それから、わからないことを自分で調べるということについても、影響がでています。ここでもやはりこういったいろんな行動とか学習面での態度の影響を入れてもですね、家庭環境の影響が独立して強くある点が注目値する部分です。

さらに、同じように中学校の数学についてやってみました。ここでも家庭環境の影響というものが、0.213と一番強くでています。今まで高校生の学習態度とか学習時間を使ってこのような分析をしてきたんですが、かなり基本的な、正答率が7割近くになるような学力テストの結果について回帰分析をやったときに、いろいろな学習面での行動とか態度とかを入れても、家庭環境の差が残るというのは、やはりショッキングでした。小学校の算数も同じような結果です。ここでも一貫して家庭環境が影響しています。

最後に、まだ分析の途上なのでこれから詳しく吟味しなければいけない問題なんですが、以下のようなことを試みにやってみました。中学生の調査票に、「小学校の時、あなたは次のような授業を受けましたか」という項目があります。小学校時代の授業経験の主観的なものですけれども、そういうことを聞いています。このなかで、たとえば「自分たちで調べる授業」、「自分たちの考えを発表したり意見を言い合う授業」、「何を勉強したいか自分で選べる授業」、「教室の外で見学したり体験したりできる授業」、いわゆる新学力観型の授業について、これを「とても受けた」というのに4点、以下3、2、1と得点を与えて、今言った項目についての合計点を出しました。合計点を出して、こういうような授業をより多く受けていたという子どもを、これらは子ども中心主義の授業とみなせますのでCHILDという記号をつけて分析を

してみました。それで、中学校の時点での数学の得点を説明できるかどうかということをやったわけです。階層、勉強時間、性別、テレビを見る時間なども入れてみました。その結果、何がわかったかというと、小学校時代にそういう授業をより多く受けていたと答えた子どもほど、中学での数学の得点が低くなるということが出てきました。まだいろいろ吟味しなくてはいけなくて、たとえば、塾という要因は入れていませんので、本当はもう少しいろいろ変数を入れていかななくてはいけないので、これはまだ途中経過の結果なのですが、もしかすると、小学校でこういう授業が多すぎると基礎・基本がおそろかになり、中学校段階になってからつまずきやすくなるというふうにも考えることもできます。つまり、小学校時代の体験が中学校のこういう学力にどう影響を及ぼすのかという分析が今後の分析課題として残るということです。ただここでも、階層というのは非常に大きな影響が出てきます。一貫しているのは、僕が作った3つのグループによる差というものが、どの段階で見ても非常に明確に表れているということです。

目に見えない教育方法、これはイギリスのバーンステインという学者が言ったインビジブル・ペダゴジーという言葉の日本語訳ですが、そういう教授法が小学校でかなりこの10年間に拡大しているとすると、そういう学習へのかかわり方というものが、親の子どもへのかかわり、家庭でのいろいろな文化的な活動といったものに左右されやすい。そうだとすると、新しい学力観的なものを意欲とか興味・関心という形で評価の対象にしてしまえば、ペーパーテストで測られるものに比べ見えにくいわけです。家庭にとってみると、どう対応していいかが非常にわかりにくい。たとえば、ペーパーテストであればさっきの志水さんのところででてきたように、いいこととかどうかかわりませんが、塾でやるということによって家庭としては防衛可能なわけです。ところが、見えにくい教育方法の学習においては、しかもそれを、これはテストで評価されるわけではなくてかかわり自体が評価の対象になってしまうわけですから、そういうものを評価の次元に落として改革を進めていくと、今いった文化的な階層のハンディを負っている家庭にとっては、対応の仕様がわかりにくくなる。ですから、そういう意味では新しい学力観によって、意欲さえも学力の評価の対象にしまうと、ある意味ではこういう階層差の問題を無視してしまう。家庭的な背景との関係を抜きに、子どもたちの意欲が高まるというふうに、やってきた可能性があるのではないかと思います。しかも、私がこの1、2年でこういうことを繰り返してきてきたのですが、新しい

学力観的なものに踏み込んで、こういった階層差の問題を議論するということはほとんどなかったと思います。つまり、旧来の学力に対してはそれがどうかということについては今までもある程度論じられてきましたが、今回、この調査を通じて明確にわかってきたことは、いわゆるペーパーではかられる学力以上に、こういう見えにくい部分の子どもたちの学習に家庭の環境差が見事に表れていて、しかもその点が全く改革の中で盲点になっているということでした。これはやはり問題だと思います。

しかも今回のデータについては、小学校の5年生と中学校2年生というかなり早い段階のところでデータをとっています。これまでは高校生のデータを中心に僕はこの問題を論じていたんですが、どうも階層差はかなり年齢の早い段階から生じている可能性が高い。そうだとすれば、こういった論点を議論の対象から外してきたことの深刻さがあらためて浮かび上がってくるのではないかと思います。